目指せ！復興新聞

2014（平成26）年
7月25日（金曜日）

町民の憩いの場

いわきの中の「富岡町」

富岡町生活復興支援センター

（いわき平交流サロン）

サロンで働く清水さん（中央）らスタッフ

いわき市にある富岡町生活復興支援センター（いわき平交流サロン）は、２０１２（平成24）年10月１日にオープンした。富岡町からいわき市に避難している町民が気軽に立ち寄っておしゃべりしたり、いろいろな情報を得られる場所として利用されるようにと設けられた。

この交流サロンは、いわき市平の元動物病院の建物を利用している。サロンは2階建てで、1階はさまざまなイベントを行うスペース。2階には、震災前にとった富岡の「夜の森の桜」の写真でつくった壁掛けが飾られており、訪れる利用者の心をいやしてくれるという。

施設を始めたころは、話を聞くだけだったが、今はイベントを行うようになっている。利用している人が楽しめるようにイベントの内容を考えている。避難する前に楽しんでいた土いじりができる園芸教室や、仮設住宅、アパートでは出すことのできない大きな声で歌える童謡や唱歌のイベントが人気があるという。（笠井智貴・鈴木優真・湊優佳）

イベントが行われるサロンの１階

リーダー 清水さん

元気に生きていく

サロンでは6人のスタッフが働いている。リーダーの清水章子さん(57)は、震災前は富岡町に住んでいた。震災が起こり、田村市滝根町の体育館や秋田県の実家などに避難した後、いわき市泉の一軒家に住む事になった。周りに知っている人がいなくて気持ちが沈んだ。

その近くに富岡町の仮設住宅が約２２０戸建てられて話し相手ができ、元気になった。富岡町役場の人に、いわき市に町の人が交流する施設ができるので手伝ってほしいと言われ、喜んで引き受けたと言う。

清水さんは「復興は長い時間がかかるので、何ができるか正直分からない。ただ今は、元気に生きていくことが大切だと考えている」と話していた。（笠井智貴・鈴木優真・湊優佳）

津波から復活

道の駅よつくら港

周りの人の協力で復活したよつくら港

たいまつをイメージした大きな看板は６号国道から目立つ

いわき市四倉にある道の駅よつくら港は、２００９（平成21）年秋にオープンした。しかし、２０１１（平成23）年の東日本大震災の津波に襲われ、店は砂とがれきの山になってしまった。その直後に、会津などからボランティアが訪れ、施設の中にある土砂を片付けた。震災から約1カ月後には、仮オープンした。

ヤマト運輸からの寄付金1億８０００万円を役立て建物を改築し、震災から1年5カ月後の２０１２（平成24）年8月11日に、無事再オープンすることができた。

駅長の白土健二さん（51）は、再オープンした日を、「お客さんが、この日を心待ちにしていたと聞き、感激で涙が出た」と振り返っていた。（水野裕貴・澤口琴音・小原舜）

道の駅よつくら港の説明をする白土さん

地元のトマト人気

白土駅長「客30万人目指す」

道の駅よつくら港は2階建て。1階は野菜や魚介類などを売り、2階はアイスやパン、海鮮丼が食べられる。人気は、近くにある「トマトランド」でとれたトマト。魚や貝もよく売れる。震災前は、地元でとれた魚介類だったが、今は原発事故のえいきょうで、漁ができないため、遠くから仕入れているという。

建物は高さ3㍍の津波にたえられるようにできている。国道からも目立つ看板は、地元の古い祭りで使っていた「たいまつ」をイメージしている。

お客さんは震災前、年間30万人だったが、去年は26万人。原発事故の風評被害があるという。駅長の白土さんは「震災前から減った4万人は少ないように見えて実は大きい。それを私達でがんばって30万人を超せるようにしたい」と語っていた。（水野裕貴・澤口琴音・小原舜）

私たちがつくりました

前列右から湊優佳（高坂小6年）、澤口琴音（青生野小5年）、笠井智貴（平三小5年）、後列右から、水野裕貴（内郷第一中1年）、小原舜（沢渡小6年）、鈴木優真（小名浜東小5年）